

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：32402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700702

研究課題名(和文)女性アスリートのキャリアトランジションに関する研究 - 彼女たちは結婚しないのか? -

研究課題名(英文)Career transition of Japanese female football players

研究代表者

上代 圭子 (Jodai, Keiko)

東京国際大学・商学部・講師

研究者番号：00569345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)： 「婚活」「結婚」「出産」をキーワードとして日本人女性アスリートのキャリアプロセスを明らかにすることと、Role Exit Theoryの有効性を検証することを目的に実証研究を行った。

その結果、トップリーグでプレーする際には不安を抱かず、現役中にも引退後に不安を抱かずに、自主的に引退を迎え、未練も持たない。だが、結婚を意識することによって、キャリアプロセスを決定していた。つまり、彼女たちのキャリアトランジションには、結婚にともなう性役割観が影響を与えたとと言える。したがって、Role Exit TheoryおよびRole Exit Modelには女性特有の要因を考慮した修正が必要である。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to reveal the career process of Japanese women athletes in Japan on the basis of their love life and marriage, and to verify the usefulness of the Role Exit Model for these players.

From this study, Most Japanese female football players do not have anxiety about their career before they play a Top-league and activity. And, they faced retirement involuntarily, and they do not have "role residual" or "role hangover". But, the career process was determined by being conscious of marriage. Therefore, for Japanese women athletes, marriage becomes a decisive factor of career transition. And, The Role Exit Theory and the Role Exit Model should be modified in the context in consideration of a factor peculiar to a woman.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 身体教育学

キーワード：キャリアトランジション キャリアプロセス 女性アスリート 結婚

1. 研究開始当初の背景

元柔道選手の谷亮子さんは、現役当時「谷でも金、ママでも金」という発言が大きく取り上げられた。同じように、北京オリンピック女子サッカー代表キャプテンの池田ひろみ選手は、オリンピック直前に名字を変更して話題になった。このように、女性トップアスリートが結婚や出産することは特別なことなのである。実際、北京オリンピックを見てみると、女子選手 169 人のうち、結婚していたのはたった 14 人で約 8% である。

2009 年度の女性の完全失業者数は、133 万人であった(総務省, 2010)。離職理由を詳しく見てみると、「結婚・出産・育児のため」と答えた女性が 4.7% (4 万人) もいた。この理由を選択した男性はほぼ 0 なので、つまり、結婚・出産・育児は女性特有のキャリアトランジションの理由であると言える。このような理由で女性が離職する要因の 1 つとして伝統的性役割感がある。金井(2010)は、働く女性にとって結婚や出産・育児はキャリアトランジションのきっかけになるとし、伝統的性役割感に対抗して就職を継続したり、再就職をしようとした場合、両立の問題が重くのしかかるとしている。

だが、このような問題はスポーツ界においても例外ではない。特に、スポーツ界にジェンダーバイアスがあることは、海外・国内問わず指摘されてきている(Hargreaves, 1994; 飯田, 2001)。また、羽田野(2006)や井谷(2005)らは、スポーツ界は男性優位、女性劣位の仕組みを生産しているとしており、稲葉(2006)は、社会的に男女間の「差異」が構築されているとしている。だが、Hall(1996)は、両性具有は社会的に構築された男らしさ女らしさという古い二元性を結合したものにすぎないとしている。つまり、スポーツ界のシステムが社会的文化的に生み出された認識や理解であるとされており、これらは、性役割やジェンダーステレオタイプが深く根ざし、人々の行動や態度、価値観の一部になっている(渡辺, 2009)とされる現代の社会全般と同じだと考えられる。

一方で、アスリートのキャリアトランジションに関する研究は海外では 1980 年代より急激に増え、(McPherson, 1980; Schlossberg, 1981; Coakley, 1983; Taylor & Ogilvie, 1994; Drahota & Eitzen, 1998; Joanne & Gyozo, 2009 など)。日本でも 1990 年代から研究されるようになった(豊田・中込, 1995, 2000; 大場・徳永, 1999, 2002; 重野, 1999; 上代, 1999, 2005; 久保田ら, 2000; 筑波大学プロジェクト, 2006, 2007 など)。だが、女子アスリートのみを対象としたものは、Allison & Meyer(1988)が元女子プロテニス選手を対象にしたものなど数点あるのみ(Dacyshyn, 1999; Leung & Carre, Fu, 2005; Young & Pearce, R Kane, Pain, 2006; Lavalley & Robinson, 2007;

Warriner & Lavalley, 2008; Gilmore, 2008; Carless, 2009; Patsourakou & Ekaterini, 2010)で、日本では河村(2003)が女子サッカー選手を対象にしたものくらいで、国内外問わずキャリアトランジションに関する研究の対象者はほとんどは男子選手である。

スポーツと女性に関する研究は、性役割に関するものから始まった(Hall, 1996)。ジェンダーや階級、人種関係などを含む社会の中の文化的な表れの 1 つとする関係論的分析(Hall, 1996)に注目が集まるようになった今日においても、女性アスリートのキャリアプロセスの研究は少なく、女性アスリートのみを対象とした研究は皆無に等しいと言っても過言ではない。

また、女性アスリートと結婚の関係を扱った研究も少なく(Brown, 1982; Földesi, 1984; Kane, 1987; Constantini & Warren, 1994; Hanson, 1996)、キャリアプロセスの中で結婚に焦点を当てた研究は見当たらない。

2010 年 7 月に文部科学省から発表された「スポーツ立国戦略(案)」において、「トップアスリートが安心して競技に専念できる環境の整備」が謳われている。その中の小項目として、キャリア形成支援と女性アスリート支援の項目が設けられ、女性アスリートに注目が集まっている。働く女性にとって、結婚や出産・育児はキャリア形成の大きなキーとなる。スポーツ選手にとっても例外ではなく、それどころか「男性らしさ」の象徴として捉えられかねず、女性らしい行動が制限される女性アスリートにとっては、アスリート以外の職の女性よりもより大きな問題だと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、結婚をキーワードに、日本の女性アスリートのキャリアプロセスを明らかにすることを目的として研究を行った。

そして、日本人女性アスリートのキャリアトランジションモデルを構築するとともに、スムーズなキャリアトランジションを行うための基礎データを提供することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、Drahota & Eitzen が 1998 年に行なった研究を基に、本研究者が 1999 年、2005 年、2010 年、2012 年の研究において用いた Drahota & Eitzen(1998)の「The Role Exit of Professional Athletes」の調査の際の調査方法を援用して行った。

(1) 調査対象

調査対象は、トップリグでのプレー経験がある女子元サッカー選手 20 名である(表 1 参照)。

表 1. 被験者一覧

ID	年齢	代表経験	現在の職業
A	37	有	主婦、サッカー指導者、サッカー解説者
B	41	有	高校教員、サッカー指導者
C	39	有	小学校教員、飲食店店員
D	39	無	マッサージ師
E	37	無	会社員
F	40	有	主婦
G	37	有	靴販売
H	39	有	主婦、サッカー指導者、サッカー解説者、大学院生
I	45	無	サッカー指導者
J	34	有	主婦、サッカー指導者、サッカー解説者
K	33	無	サッカー施設管理
L	43	有	サッカー解説者、サッカー指導者
M	31	無	公務員
N	28	無	自営業
O	43	有	アルバイト
P	34	有	アルバイト
Q	34	無	アルバイト
R	34	有	主婦、サッカー指導者、サッカー解説者
S	38	有	主婦、サッカー指導者、サッカー解説者
T	30	無	会社員

被験者の年齢は 28 歳から 45 歳(平均 36.8 歳)であり、20 人中 11 人が日本代表経験者であった。

また、12 人は結婚経験があり(うち現役中の経験 5 人)、8 人は出産経験があった(うち現役中の経験 2 人)。

(2) 調査手順

平成 23、24 年度

調査対象者へ直接メールまたは電話にて連絡し、本調査への協力を依頼した。

そして後日、半構造化面接法による面接調査を実施した。

面接調査は個別に実施し、所要時間は被面接者 1 名あたり 60 分程度であった。質問項目は、過去の調査と同様に Drahot a & Eitzen (1998) の「The Role Exit of Professional Athletes」のインタビュー調査項目である「Interview Guide」を援用した。だが、面接の進め方は、順をおって Interview Guide の項目を 1 項目ずつ質問するのではなく、自分のサッカー史を被験者自身に自由に語ってもらっていき想起法で進め、その中で上記のガイドの項目、および本調査において検証に必要な点を、面接者が補足する形で質問する形である遡及法を用いた。なお、直接面接調査を実施の際には、被面接者からの了解を得て、面接内容を全て録音した。

平成 25 年度

前年度までの調査データについて、分析を行った。

分析方法は、Mayring が構造化した質的内容分析を援用した。まず、インタビューの中でポイントと思われる部分を、要約的内容分析を行い、次に、説明的内容分析を行う。そ

して最後に、構造化内容分析を行った。

インタビューの中で重要な部分については、まず要約的内容分析を行い重要な言葉を抜粋した。次に、説明的内容分析を行い、最後に構造化内容分析を行った。

その後分析した内容は、Drahot a & Eitzen (1998) が構築した Role-Exit Model のステージに分け直して、段階別に表にまとめた後に各ステージ毎の特徴を明確にし、キャリアプロセスを明らかにした。

4. 研究成果

(1) サッカーを始めた時期、きっかけ

約 60% が小学生から始めていたが、高校生になってからサッカーを始めた選手が 40% もいた。男性の選手の場合、遅くとも小学生では初めている(JFA、2012)ことから、当時は女子の場合、遅くから始めてもトップリグでプレーできていたことが推測される。

また、サッカーを始めた理由は、「面白そうだったから」というものが 30% と最も多く、次いで「友達に誘われたから」25%、「先生に誘われたから」20% であり、自発的な理由よりも第 3 者の影響が大きいことが明らかになった。

(2) トップリグでプレーした理由、トップリグでプレーすることへの不安

トップリグでプレーしようと思った理由としては、「サッカーをやりたいから」というものが 40% と最も多かった。当時の日本には、学校期後に女子選手が趣味でサッカーをできるようなチームはなかったことから、女性が学校卒業後サッカーを続ける場合、トップリグに進むしかなかったことが見受けられる。また、トップリグでプレーすることへの不安を感じた選手はほとんどいなかった。

(3) プロになる前の不安

彼女たちのほとんどはアマチュア選手であり、プロとしてプレーしていた選手は 20% しかいなかった。この状況は彼女たちが望んだものではなく、チーム側の事情であった。当時、日本の女子サッカーは、実業団チームという会社の福利厚生のためのチームで行われていたため、彼女たちはその会社の社員であった。その後、クラブチームができたが、プロになることはなく、余所でアルバイトなどをしながらプレーしていた。

そのため、プロになった選手は自らプロになることを希望していたため、日本人男子サッカー選手と同様に Drahot a & Eitzen (1998) の結果とは異なり、プロ選手になることへの不安を持つことはなかった。

そして、男子のプロ選手のように移籍もなく、今回の調査でも、60% が 1 回も移籍をすることなく引退していた。

(4) 現役中の引退後の模索

引退時期や引退後について考えていた選手が50%以上おり、その中には、出産を考慮する場合もあった。だが、不安は持っていない。

そして、日本人男子サッカー選手と同様に、引退後に向けた準備をしている選手はほぼいなかった。

(5) 引退（キャリアトランジション）

引退は、自主的なものであった。この結果は男子とは全く異なり、男子はほとんどが非自主的な引退であり、チームから解雇されていた。そして、Dorahota & Eitzen (1998) の結果でも非自主的な引退が多かったことから、日本の女子選手の特徴であると言える。

しかしながら、自主的な引退であっても、不本意な決断であった選手もいた。例えば、3選手は、夫から「そろそろ辞めたら」と言われて引退を決断したとしている。

(5) 引退後

ほとんどの女子元サッカー選手が引退後も男子選手と同様にサッカーに携わってみたいと考えているが、50%の元選手は趣味で良いと考えており、トップレベルでプレーするサッカー選手に対する未練は持っていなかった。

そのような状況になる理由について、夫も同様の性役割観を持っていることが多いことが上げられた。そのため、引退後も家事や育児が優先であり、夫が非協力的な場合は、サッカーを仕事とすることはできない状況となっていることが明らかになった。

(6) 恋愛観

日本人女子サッカー選手は、恋愛とサッカーを両立できるとは思っていないことが明らかになった。理由として、「家事とサッカーを両立できない」というものであった。

日本人女性の中には、家事や育児は女性がするものという概念があり、親や先輩からもそのように教えられていた選手も多くおり、そのため、結婚したらサッカーは引退するものと思っていた選手もいた。

したがって、日本人女子サッカー選手は、性役割感のためにサッカーから離れる選手が多々いることが明らかになった。

総じて、以上の結果から、トップリーグでプレーする際には不安を抱かず、現役中にも引退後に不安を抱かずに、自主的に引退を迎え、未練も持たない。だが、結婚を意識することによって、キャリアプロセスを決定していた。そして、彼女たちのキャリアトランジションには、結婚にともなう性役割観が影響を与え得ると言えることが、本研究において明らかになった。

なお、モデルについては、当時構築したものについて再検討中であり、投稿論文において発表する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

Keiko Jodai, Haruo Nogawa 「Career Transition of Japanese Women Football Players」 the FREE conference 2013 in Copenhagen, Copenhagen Denmark, 2013